

▼コラム

ウィズコロナとアフターコロナの一考察（最終回）



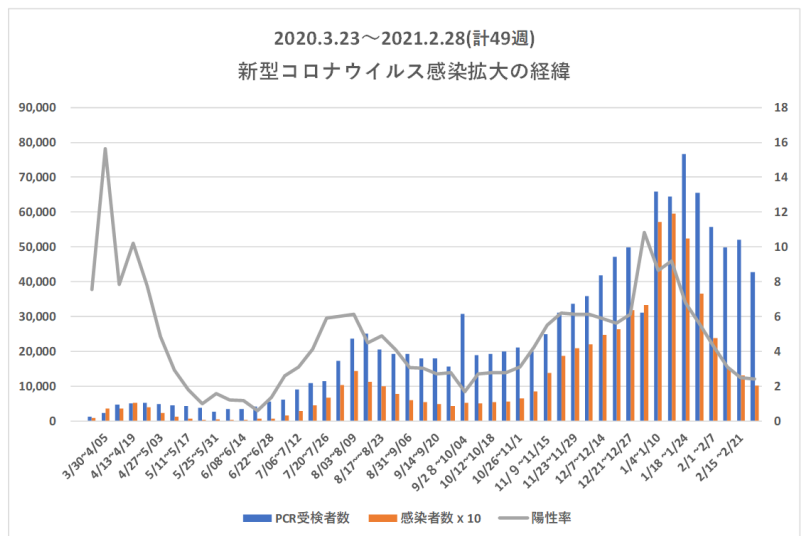
シビル NPO 連携プラットフォーム 個人正会員
有岡 正樹

6. 日本での 1 年間におよぶ感染拡大抑制の政策を振り返って

(1) 3 つの「波」の経緯

本連載の(その3)では、寄せては返す「第3波」感染拡大のコロナウイルスの実態と対応策について、後手を引いた背景を含めて詳述した。そして(その1, 2)で述べた2つの拡大・収束の波の実際を参考に、そのある種の規則性に着目して、いよいよ本番と目される「第3波」について今後の収束のパターンの想定を試みた。

右図は昨年3月23日から直近の本年2月28日までの49週におよび各週平均1日当たりの感染者数、PCR検査受検者数および陽性者数の推移を図化したものである。



収束を想定している3月半ばまでにはまだ2週間あるが、各「波」およびその中間期それぞれの平均値を右表に一覧表とした。右端行には筆者が提起した想定感染者数の試算値が赤字で併記されているが、ほぼ実際に近い値を示している。

「第3波」が収束するとしている3月半ば以降には、4ヵ月後の東京オリパラの開催を第1優先国家事業として最善が尽くされることになるだろうが、この表を見てもわかるように、「第1波」～「第3波」それぞれのいわば積分値＝期間×平均感染者数は、2100人週、6800人週及び48000人週と約3倍、7倍と級数的に増えている。この右肩上がりの勢いは、その後の一定の端境期をはさんで更にこの積分値の大きい「第4波」があり得る懸念もせざるを得ないことになる。ワクチン接種の効果やその集積結果

1年間の週平均感染者数等の推移

2020年3月23日～2021年3月14日（3月1日～14日は推定）

「波」・中間期	期間	平均PCR数	平均感染者	平均陽性率	計算値
第1波	7週平均	3,960	300	8.1%	—
第1中間	8週平均	5,015	67	1.3%	—
第2波	8週平均	17,152	852	5.0%	802
第2中間	9週平均	22,602	605	2.7%	627
第3波-1	19週実績	43,314	2,571	5.8%	2,496

による「集団免疫」といった拡大抑制要因の普及は、日本の場合もう1年先との意見も多い。これまで1年余、様々な対応策を見直し、その是非を取捨選択をして、「第4波」への勢いを克服することになろう。そのためには感染医療関係はもちろんだが、国民一人一人が、こうした3つの数値の相関性にも目を配りながらその推移に関心を持ち続け、ワン・オブ・ゼムとして日々を過ごす必要がある。

(2) 4 つのキーファクター展開の実際

「第1波」の拡大が緒に就きだした昨年4月初旬、日本政府が重い腰を上げて第1次緊急事態宣言を発出した際、安倍首相および尾身専門家委員会委員長が、その記者発表の席で、宣言が後手を引いたことの原因として、「PCR検査の目詰まり」を上げていたことを覚えておられる人は多い。また、今年に入っての第2次緊急事態宣言の発出も、1日当たり最大感染者数を示したまさに1月7日その日であった経緯にも詳しく触れて、日本政府のリスク認識の劣後というか、「鈍すりゃ貧する」体質を憂えた。

筆者も、今回のコロナ禍の初期段階においてオーストラリアやニュージーランドの友人との度重なる意見交換の中で、幾度となく「PCR検査」の圧倒的な不足を言及したか図り知れない。政府のその政策

提言も、またマスコミの感染拡大政策の評価報道にしても、やっと最近になって週単位で云々し出してはいるが、定量的には「PCR 検査」がキーファクターであることにはほとんど触れていない。以下今一度その重要性について、世界でのその評価も例に上げて再度提言しておきたい。

いまだ‘日本のこれまでの累計新規感染者数 20 万人を超える’という記事に、不安感をあおられると同時に、別紙面での‘米国では 2000 万人超’といった報道に‘人口が3倍もちがうのだから’ということも考慮しても、オーダーが違ふほど‘日本はました、うまく対応している’とやや安心させられたりする。これについても、感染者数と PCR 検査受検者数との関係軽視を垣間見ることが多い。

下表は、worldometer の世界のコロナウイルス事例(2021.1.22:98 現在,感染者総数 9819 万人) データベースから、自由主義国で日本と関係の深い欧米諸国を選んで、いくつかの COVID-19 関連累計数値を日本との比較で抜粋したものである。それぞれの国の数値については、その国の総数と人口 100 万人当たりの数値の両方が整理されている。オーストラリアのシンクタンクであるロウイー研究所ではコロナ対策効果について、下表の①~⑦の 7 項目が脱パンデミックにどのような影響を与えるかを指数解析している。これは筆者らがこれまで日本の感染拡大を調査・分析してきた視点と質的に同じである。

通常我々が新聞記事等報道を通じて知るのは前者で、人口当たりで云々というのは一般の人が目にすることはほとんどない。表の 7 つの国で米国と日本は億単位の人口で、それ以外は数千万人の人口である。このうち感染者数、PCR 受検者数および死亡者数の総数では、米国、その他の 5 つの国、そして日本の順で、数字が 1 桁ずつ違っているの、互いにそれぞれの差を比較、評価するのはほとんど意味がないのが解る。‘日本は他の近代国家に比べ、それぞれの数字が圧倒的に少ない’との一言以上の何物でもない。ここでは、死亡数を含めコロナウイルスに関する基本的な 4 つの数値について、主として人口 100 万人当たりで、下の表を用いて定量的に評価してみよう。

世界のコロナウイルス事例：98,188,110(抜粋)

最終更新日：2021年1月22日12:03 GMT

感染者数順位	国名	総数			人口100万人当たり			陽性率 ⑦ = ⑤ / ⑥	⑧ 日本を'1'として各国の感染者数の倍数	⑨ 日本を'1'として各国受検者の倍数	⑩ = ⑧ / ⑨ 受検者数の重みづけ
		①感染者数	②死亡数	③テスト数	④感染者数	⑤死亡数	⑥検査受検数				
1	米国	25,196,086	420,285	293,562,574	75,872	1,266	883,992	8.6%	27.8	18.2	1.53
5	英国	3,543,646	94,580	66,546,047	52,047	1,389	977,391	5.3%	19.0	20.1	0.95
6	フランス	2,987,965	71,998	40,885,502	45,719	1,102	625,597	7.3%	16.7	12.9	1.30
7	スペイン	2,560,587	55,041	30,165,217	54,754	1,177	645,039	8.5%	20.0	13.3	1.51
8	イタリア	2,428,221	84,202	30,166,765	40,194	1,394	499,351	8.0%	14.7	10.3	1.43
10	ドイツ	2,110,297	51,229	37,449,922	25,142	610	446,183	5.6%	9.2	9.2	1.00
39	日本	345,221	4,743	6,145,209	2,734	38	48,671	5.6%	1.0	1.0	1.00

イ) 感染者数

表中薄橙色で網掛けされた④を見ると、総数での比較以上に日本の人口当たりの感染者数は、他の国に比べ少ない。ただこれまでも繰り返し述べてきたように、感染者数は PCR 検査による結果として数値化されるので、その検査受検者数に原則比例する形で増減する。そのことを定量的に比較するために、感染者数および検査受検者数について、日本を‘1’として他国の倍率を表示したものが⑦および⑧である。感染者数で 9~27 倍、受検者数で 9~20 倍と、いずれも 1 桁違ふ差があるのが解る。この 2 つの数値がどう互いに関連しているのか、実質的な感染者数の差を出すためにその比を⑨として求めた。それぞれが日本の‘1’に近いほど、感染者数の多さの重みが同じであるということになる。英国やドイツは日本と感染者拡大抑制策の成果(努力結果)が同じであるのに対し、1.5 倍の感染者数である米国やスペインは政策の成果が日本に比べ 2/3 ということになる。残念ながら、日本は検査数が圧倒的に少ないだけなのである。

ロ) PCR 検査受検者数

以前にも述べたように、人口当たりの感染者数を減らすには質と量の両面があって、質的には、これまで 100 人の内 10 人が感染していたのをワクチン供与など疫学的にはもちろん、科学的、社会的、経済的等あらゆる手段を使って、国民ひとり一人が感染者とならないように指導・支援することであり、量的には伝染者数(ウイルスを移す感染者)をいかに減らすかである。この感染症が、何らかの陽性症状が出た感染者が健常者に伝染させるというのであれば、その前に感染者を隔離、治療すればその人のいわゆる基本再生産数は 1 人以下のかなり小さな値となるが、無自覚または無症状・軽症状の陽性者でも、そ

の人が発する飛沫またはエアゾールを介して伝染者となるのであれば、話は全く別である。新型コロナウイルスは後者に属するので、検査をしなければ極端には‘ねずみ算’もあり得ることになり、爆発的な感染拡大につながることになる。

陽性率 10%というのは 100 人の内 10 人、国民 1 億人のうち 1 千万人が陽性ということであるので国民全員を検査して、その結果としての感染者一人ひとりを治癒させるというのが理想である。もちろん現実的にはそれはありえないので、何らかの兆候のある人を選んで一人でも多く感染している人を見つけ出し、隔離・治療を施してその人を救うと同時に他の人に感染させないようにすることになる。無症状の陽性者を見つけるため、無作為に一人でも多くの人を PCR 検査することが重要となるが、そのたびに受検者のうち何%かが感染者（陽性化）と判り、法的に隔離・治療が保健所等公的機関に義務付けられている。症状に応じてというわけにはいかないもので、施設、医療設備・人材その他を満たして対応するのは至難の事象となり、検査数をできるだけ減らしてということになる。政府のアドバイザーであるトップの専門家が「目詰まりを起こして」と釈明をしなければならない事態が 1 年たった今も続いている。

もう多くの人にとっては自明のことである上記を前提に、前頁の表のうち⑥を見てみると、日本は他国に比べ 1/10~1/20 と極端に少ない。そしてそれにもまして重要なことは他国の検査受検率が英国の 97%を筆頭にドイツの 45%まで、国民の半分以上が受検しているのに対し、日本はわずか 5%に過ぎないということである。とくに英国では最近の変異型ウイルス感染が猛威を振るっていることもあり、ほぼ国民全員が受検というレベルである。大きなリスク認識の差を再認識せざるを得ない。

八) 陽性率

陽性率は、受検者数当たりの陽性者数の割合であるので、感染者拡大抑制策の質的な評価を示しており、上述と同様に日本他 3 ケ国は 5%台、それ以外の 4 ケ国は 8%台となっている。収束に向かっている「第 3 波」では PCR 受検者数も減少傾向にあるが、感染者数も減少しており、結果として陽性率はかなり下がっている。緊急事態対応策の成果を見ることができている。感染抑制と経済回復の両輪を回すためには、今後 PCR 検査を増やす中で、陽性率を 1%レベルに下げながら、ワクチン接種が国民の過半にまでいかに行きわたせられるかに、全力を尽くすしかない。豪州の知己によると、新規感染者はほぼゼロだが、変異型の侵入を阻止すべく、例えば外でマスクをつけていないと 200 豪ドル（約 15000 円）の罰金との規制が通達されたという。‘検査をいとわず、陽性率ゼロを目指す’政策が徹底している。

二) 死亡者

これについては PCR 検査受検者数とは関係なく、人口 100 万人当たりの数値が他の 6 ケ国平均の 1156 人に対し 38 人であるので、3/100 という圧倒的な少なさである。この少なさには驚くしかないが、このことはノーベル生理学・医学賞受賞の京大山中伸弥教授が、‘日本は何らかの原因（ファクター X）でこれまで欧米に比べ死亡者が少ない’ことを提言されてきたことが、明確に数字に表れている。国や自治体の政策や日本人自身の自己管理能力なども、相対的に関係していると思いたい。

これに高齢化率の高い日本の事情を考慮すると、一層日本の優位性が強調できる現実ではある。安全・安心を求める外国人が‘東京周辺の不動産に関心を示しているそうだ’と外資系に勤める娘が話していたが、「瓢箪から駒」となるのかどうか……。

(3) 世界の動向と日本

(その 1) で述べた世界全体で累計感染者数が 500 万人を超えることの日数は、その昨年 11 月の 9 日間から今年 1 月半ばには 7 日間にまで縮まったが、その後反転し直近では 13 日間ということまでピーク時から半減近くへと改善されている。こうした世界の傾向も反映される形で、日本の「第 3 波」のピーク以降感染者数の日々減少は、専門家もいぶかるほどの勢いで、3 月早々には週平均 1 日当たり 1000 人程度となりそうである。1 月初めの急拡大もにらんで、3 月末 2000 人レベルでの収束を試算していたケースに比べかなり改善された想定となる。

3 月後半からオリパラ開催中を含めての約 25 週間を、1 日平均 800 人の感染者という低位安定型の状況を維持するとして、20000 人週間の拡大抑制エネルギーが必要ということになる。(1)でも述べたように、ワクチンの接種効果がある程度見込むとしても、「第 2 波」と「第 3 波」の中間に値する大きさである。準緊急事態宣言を半年間出し続けてでも、オリンピックを何としてでも開催することが、日本にとって「第 4 波」を伴わない、真の「感染拡大終息」につながると信じて、この連載を終えたい。